令和５年度　伊那市立伊那中学校評価表

学校関係者評価；（A：十分達成された　B：ほぼ達成された　C：不十分であった）　自己（項目間相対を加味した到達度）評価（a：十分達成された　b：ほぼ達成された　c：不十分であった）

学校教育目標	重点目標（中長期的目標）
志を持て　勉強せよ　親切に (1)めざす生徒像 ○ 夢や目標に向かい、主体的に行動できる生徒 ○自主的・主体的に学び、学力を伸ばす生徒 ○人やものの“いのち”を大切にする生徒 (2)望む教師像 ○心身ともに明るく健康で、情熱と使命感に燃える教師 ○ 自己課題を持ち、生徒・同僚・地域・保護者から謙虚に学ぶ教師 ○ 豊かな人間性と広い教養、高い専門性を磨く教師	向学の気風あふれる学校づくり
	今年度の重点目標
	(1)主体的に学ぶ生徒の育成
	(2)探究学習の推進
	(3)「教師の枠」を問う学校づくり

総合評価

○学校自己評価アンケートで「自分にはよいところがあると思う」に「あてはまる」と回答した生徒は全体で84．4％（昨年度比5．5％上昇）、また、89．3％（昨年度比2．1％下降）の生徒が「先生はあなたのよいところを認めてくれている」と感じている。同様の質問項目について、全ての保護者と職員が肯定的な回答をしている。自立した生徒の育成を目指す校長の理念のもと、各職員が生徒の長所やよさを積極的に評価したり、生徒を信頼して活動の計画や実施を委ねたりする姿勢が結果に表れている。
○自ら求めて学ぶ生徒へと変容していくために、長期休業中に自分の興味関心を生かし、やりたいことに取り組む探究型学習「伊那中マイチャレンジ」を拡充。一人一人の探究の成果を伝え合う活動を取り入れ、探究活動を、日常の授業へ反映し始めた。学校自己評価アンケートで「自分で考えて行動する力が育っていると思う」に「あてはまる」と回答した保護者は全体で82．4％（昨年度比1．4％下降）であった。また、Zoom 配信を活用し、オンライン授業を日常的に取り入れるなど、学習する方法や内容、時間や場所を限定しない取組を行い、多様な学び方を保障しながら一律的な授業のあり方を見直している。

成果と課題	評価	改善策・向上策
(1)小学校で総合学習・総合活動や自然の中での体験的な学びを積み重ねてきた生徒の育ちをよさとして位置付け、生徒の持っている好奇心・探究心を生かすよう取り組んだ。また、マネジメントタイムでは、自分自身の学習を振り返り、自身の学びの設計を進めた。主体的に考え、学習のサイクルを作っていく時間となった。発想や考え方を大切にし、活動の成果を認めその生徒自身の自信につながる取組を進めた。	B b	○マネジメントタイムでは、生徒の主体的で自立的な学びを促すため、生徒自身による「学びの設計」の実現を目指す。生徒自らが授業と家庭学習を一体的に考え、生徒自身が見通しを持てるよう、教師の支援の在り方について引き続き模索していく。
(2)「伊那中マイチャレンジ」では、生徒自らが「問い」を設定し探究的に学ぶことができるよう、「ガイダンス→長期休業での実施→発表準備→発表会」というサイクルが定着。学級学年の枠を超え、全職員で一体的に取り組み、探究学習への手応えを得た。また、高校の職員との連携が実現し、共に考え合った。	A a	○教科学習にも探究的な学びが生きていくようしていく。日常の授業に生徒の「問い」から出発したり終末時に個々の多様な疑問や追究したいことを新たな「問い」として位置付けたりして、追究が家庭学習や次の授業につながるよう取り組んでいく。
(3)これまでの「当たり前」を問う学校づくりを進めた。ジェンダーレス化などの多様性を意識し学校生活での運動着の着用も認め、毎日の全校一斉清掃を廃止したり、常に目的を意識し、手段に囚われない活動を位置付けたり、会議を精選し、職員の自主的な取組を保障したりした。	A a	○教師自身の当たり前が、生徒にとって「よいこと」としてしまっている。本来の目的は何かを常に職員全体で共有し、意識改革することで、手段に柔軟性を持たせていく。

領域	対象	評価項目	評価の観点	成果と課題	評価	改善策・向上策
教育活動	教育課程	○生活と学習を切り離さない学校づくり	○生徒の生活の場に、思考力・判断力・表現力を育成する場面が保障されているか	○教師の指示だけでなく、様々な場面で生徒自身が選択や調整ができる自由度の保障をしてきた。例えば、制服の着用は一律に制限するのでなく、天候や気温を判断し何を身に付けたらよいのかを自分自身でジャージやシャツなどの選択をしながら、日常的に生徒が主体的に着こなしを考え、判断していくことで、応用力を働かせながら自分で生活をつくる経験を積んだ。	B b	○教員も生徒も学校づくりの当事者意識を持たせるために、予めきまりと言う「教師の枠」にはめないことの継続。しかし、これはあくまで手段。生徒に考えさせることの目的を共有していきたい。
		○活用の力を伸ばす学習指導の推進	○学習指導要領に示された学力観に基づいて、授業やテスト改善が進められているか	○知識注入型の学習から脱却し、中間テストの廃止、思考力・判断力・表現力を問う定期テストへの転換を図った。また、思考力を問う問題を導入し、様々な教科で教科書や資料の持ち込みを認め、テストを通して生徒の意識改革も進めている。	B b	○テストのあり方について職員で学び合うことで、授業の構造、内容や方法について研鑽を積むことを継続していく。特に問題発見・解決能力の向上、多様な他者と協働的に追究する力を伸ばし、それをどう評価していくかを検討し、全教科・領域で実践していく。
	学習指導	○個の多様性を生かした授業改善	○「子どもたちはどう学ぶか」という生徒の視点で授業を進めたり、ふり返ったりできているか	○隔週水曜日の職員会議は内容を精選し、時間の短縮を図った。また、水曜日以外は定期的な会議は廃止し、必要に応じて関係者で連絡を取り合った。その結果、時間が生まれ、職員は時間や場所にとらわれず、日頃の生徒の姿を語り合い、教科を越えて授業内容を相談し合ったりICT機器の取扱いを検討したりしていた。	A a	○教科や学年、年齢の枠を越えた会話の日常化。会話の中で生徒の様子が語られ、その会話から明日の授業内容や方法のヒントが得られるような空間づくり、自由に使える時間を創出していく。
		○「主体的・対話的で深い学び」を柱とした学習	○自由度を保障し、生徒一人ひとりの考えが生きる授業ができているか	○「伊那中マイチャレンジ」において探究学習に手応えを感じ始めた職員たちは、日常の授業における探究学習の展開を模索し始めた。特に、授業での終末におけて生徒一人ひとりに新たな「問い」が生まれる授業の実現について、課題意識が生まれた。	B b	○伝え合う活動を位置付けた探究型の授業へ改善を図る。思考力・判断力・表現力の強化を伴う授業について職員研修や授業を見合う機会に研鑽するとともに生徒の意識改革も進める。
	部活動	○主体的に部活動に取り組む生徒の育成	○生徒たちの自主的な活動により、心身の鍛練ができ、個性の伸長がなされたか	○日常生活同様に主体性をもって自分たちで考えて動こうとする個や集団づくりを目指しているため、少ない顧問の指示でも自主的に活動できる。ただし、依然として結果至上主義から脱却できない現状は課題でもある。	A a	○部活動で取り組んだことが中学校時代の良い思い出となるよう、時間や場所、顧問の指導時間の確保など活動の機会を制限しない環境を整えてきたい。一方で、部活動の本来の目的を教職員で確認してきたが、地域移行も含め地域移行は余り進んでいない。
		○効率よく活動する部活動運営	○限られた時間の中で、部員にとって意味のある部活動が実施されたか	○朝部活廃止、1日2時間以内の活動、平日1日は休養日を設ける等、県の指針に則った運営を実施。限られた時間の中で、顧問と生徒が連絡や相談をし、効率のよい練習メニューを組み、バランスよい生活を送れるようになってきている。	B b	○伊那市教育委員会から示された部活動指針に則って運営していく。休日の部活動に関する地域移行は、市教育委員会からの指示の仰ぎながら、健全な部活動運営に努めていく。
	生徒指導	○どの生徒にも居場所があり、個が尊重される学校	○生徒一人ひとりに応じた学習環境や学習方法が保障されているか	○教室に入りにくい生徒には、教室以外の寺子屋などのスペースを「多様な学びの場」として提供し、オンライン参加し、個々の対応をしてきた。ZOOM を活用した授業配信は、様々な活動場面でも生徒をつなぐ ICT 機器としても、生徒支援のための必需品としても活用している。	A a	○不登校だった生徒が自ら学びの場を選択し、学習を再開できる等、固定概念にとらわれずに個々の生徒や家庭状況に応じて様々な学びの場を提供できるよう、継続し取り組んでいく。
		○見通しの可視化と各方面と連携した生徒指導	○支援の方向性が明確化され、家庭、医療や福祉、行政と連携した生徒指導ができているか	○支援が必要な生徒に関するアセスメントシートを作成。生育歴、関わっている人や組織、今後の支援の具体を一覧にして、情報共通した上でのチーム支援、諸機関との積極的な連携と専門性を生かした助言や協力を得られた。	A a	○担任など一部の職員だけでの対応でなく、アセスメントシートを利用した現状や展望を可視化して、より多くの人がその子や保護者に関われるようなしくみを継続していく。そして、多様化する生徒の状況に応じた生徒指導を行っていく。
学校運営	安全	○校内や通学路の安全の確保 ○自然災害等への迅速な対応	○校内や通学路の危険や改善箇所の把握を行ったか ○自然災害や獣の対応など適切に行ったか	○生徒や保護者、職員から寄せられる情報や、校内巡視によって把握した箇所について速やかに関係機関へ連絡。また、気象情報などにも注視し、登下校などの見通しをもった対応をした。11月の避難訓練では、地域における中学生の役割の自覚化を目的として、保育園との共同訓練を実施した。	A a	○非常時は当然のこと、平時から地域とのコミュニケーションに努める。学校を開放して地域の皆様が来校できる環境づくり、来校した際は住民と管理職が対話し、学校や地域の状況を共有する姿勢を継続していきたい。
		○情報社会に生きる生徒の安全指導	○情報化の中で被害に遭わない対処の仕方を身に付けたり、他人の権利を侵したりしない生徒の育成ができたか。	○全校集会でSNSの危険性について講習会を実施。道徳や人権週間では、情報機器の功罪を考えた。家庭での見守りを期待して、保護者への啓発を行った。また、「命の学習」をカリキュラム化。学年の計画に即して、年間を通して、自らの命を考え、守る教育に力を注いだ。	B b	○GIGA スクール構想により、今後、情報機器やアプリ利用は加速していく。有益性もあるので制限するのではなく、その都度、より良い使い方について啓発していく。
	地域との連携	○家庭や地域との意思疎通	○学校でのようすを情報発信できたか ○生徒個々のようすについて、家庭との間で情報共有や指導方法の方針について共有したか	○学年学級通信やホームページで掲載し、地域の方から本校の取組への共感のメッセージをいただいた。また、授業参観をZoom配信と参集を併用し、来校ができなかった保護者からも好評であった。 ○学校の様子をより見やすくするために参観週間や伊那中公開を多くの地域の方に案内し、自由に参観いただく機会をつくるように努めた。校長室も開放して地域の声が直接届くよう工夫した。	A a	○情報が手元に届き、保存性が高いツールとして回覧板やホームページ、オクレンジャーを使った広報活動や Zoom を活用した授業配信を継続していく。 ○今ある活動の中で、保護者や地域住民が学校に来ることができる機会となるよう、企画段階から工夫する。また、申し出があれば可能な限り公開していく。
		○学習を学校や教室にとどめない	○地域の素材を活かした教材、保護者、地域の方に参画していただく授業や活動をすることができたか。	○いーなたん（1学年）、5日間に及ぶ職業体験学習（2学年）、高校の先輩・先生方と語る会（3学年）、地域の人々との交流（特支学級）等、地域住民に参画していただき、活動のねがいや方法を共有しながら実施した。文化祭では、地域の皆さん、保護者、高校生等を講師に30講座の探究の時間（マインクエスト）を実施し、生徒たちは探究に対する姿勢や学び方に触れ好評を得た。	A a	○地域資源を最大限活用した総合的な学習の時間や教科学習、地域を舞台にしたプロジェクト学習を進めていきたい。また教員が積極的に地域に出て地域を知り、地域住民と語りあって交流することが、学習活動の可能性を広げ、翻って生徒のための学習になるといった感覚を養っていく。

	研修	○学習指導要領に示された学力観に基づいた学習指導の実際	○主体的・対話的で深い学びにつながるような授業観の転換ができたか	○生徒一人ひとりのよさに着目し、授業のあり方を学び合うグループ研究や、1月実施の伊那中学校自主公開授業などを通して、教師自身の今までの学力観・教育観を問い返す取組を行った。	B b	○旧来型の授業やテストからの脱却は容易ではないが、継続して、教科や学年、経験や年齢などの枠に囚われず、生徒の視点で授業を考えたりふり返ったりしていくことを大切にしていく。
		○地域に学び、社会性を身に着ける教師	○地域の方に学ぼうとし、子ども人権に配慮した接し方が身に付いているか。	○全職員が日常的に電話当番を行い、外部や地域の方からの電話応対を体験。また、12月には、保育園のクリスマス会に 20 代職員が参加し、園児と接し、社会的有用感を醸成。バランスのとれた人間性の育成を図ると共に、子どもの人権について学ぶ機会を設定した。	A a	○PTAや地域の方々との関りから、教師の人権感覚を養っていくという基本的立場を職員で共有し、意図的に、ふれあいの場を創造していく。また、引き続き、電話当番や保育園との交流等の活動に取り組んでいく。